

[B年]復活節第3主日(2026年4月19日)**【旧約聖書日課】エゼキエル書 34章7～15節**

7それゆえ、牧者たちよ、主の言葉を聞け。8わたしは生きている、と主なる神は言われる。まことに、わたしの群れは略奪にさらされ、わたしの群れは牧者がいないため、あらゆる野の獣の餌食になろうとしているのに、わたしの牧者たちは群れを探しもしない。牧者は群れを養わず、自分自身を養っている。9それゆえ牧者たちよ、主の言葉を聞け。10主なる神はこう言われる。見よ、わたしは牧者たちに立ち向かう。わたしの群れを彼らの手から求め、彼らに群れを飼うことをやめさせる。牧者たちが、自分自身を養うことはもはやできない。わたしが彼らの口から群れを救い出し、彼らの餌食にはさせないからだ。

11まことに、主なる神はこう言われる。見よ、わたしは自ら自分の群れを探し出し、彼らの世話をする。12牧者が、自分の羊がちりちりになっているときに、その群れを探すように、わたしは自分の羊を探す。わたしは雲と密雲の日に散らされた群れを、すべての場所から救い出す。13わたしは彼らを諸国の民の中から連れ出し、諸国から集めて彼らの土地に導く。わたしはイスラエルの山々、谷間、また居住地で彼らを養う。14わたしは良い牧草地で彼らを養う。イスラエルの高い山々は彼らの牧場となる。彼らはイスラエルの山々で憩い、良い牧場と肥沃な牧草地で養われる。15わたしがわたしの群れを養い、憩わせる、と主なる神は言われる。

【使徒書日課】ペトロの手紙一 5章1～11節

1さて、わたしは長老の一人として、また、キリストの受難の証人、やがて現れる栄光にあずかる者として、あなたがたのうちの長老たちに勧めます。2あなたがたにゆだねられている、神の羊の群れを牧しなさい。強制されてではなく、神に従って、自ら進んで世話をしなさい。卑しい利得のためには献身的にしなさい。3ゆだねられている人々に対して、権威を振り回してもいけません。むしろ、群れの模範になりなさい。4そうすれば、大牧者がお見えになるとき、あなたがたはしほむことのない栄冠を受けることになります。

5同じように、若い人たち、長老に従いなさい。皆互いに謙遜を身に着けなさい。なぜなら、

「神は、高慢な者を敵とし、

謙遜な者には恵みをお与えになる」からです。

6だから、神の力強い御手の下で自分を低くしなさい。そうすれば、かの時には高めていただけます。7思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを心にかけてくださるからです。

8身を慎んで目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています。9信仰にしっかり踏みとどまって、悪魔に抵抗しなさい。あなたがたと信仰を同じくする兄弟たちも、この世で同じ苦しみに遭っているのです。それはあなたがたも知っているとおります。10しかし、あらゆる恵みの源である神、すなわち、キリスト・イエスを通してあなたがたを永遠の栄光へ招いてくださった神御自身が、しばらくの間苦しんだあなたがたを完全な者とし、強め、力づけ、揺らぐことがないようにして下さいます。11力が世々限りなく神にありますように、アーメン。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 10章7～18節

7イエスはまた言われた。「はっきり言っておく。わたしは羊の門である。8わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。9わたしは門である。わたしを通過して入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。10盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。11わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。12羊飼いでなく、自分の羊を持たない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。——狼は羊を奪い、また追い散らす。——13彼は雇い人で、羊のことを心にかけていないからである。14わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。15それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。16わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。17わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛して下さる。18だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

エゼキエル書 34章7～15節

7それゆえ、牧者よ、主の言葉を聞け。8私は生きている——主なる神の仰せ。私の群れは牧者がいないため、略奪に遭い、あらゆる野の獣の餌食となっているというのに、私の牧者は群れを求め求めもしない。牧者はわが身を養うが、群れを養わない。9それゆえ、牧者よ、主の言葉を聞け。10主なる神はこう言われる。私は牧者に立ち向かう。私は彼らの手から私の羊の群れを求め求め、彼らに群れを養わせない。牧者は二度とわが身を養えなくなる。私は彼らの口から私の群れを救い出す。私の群れが彼らの餌食となることはない。

11実に、主なる神はこう言われる。私が自ら自分の群れを求め求め、彼らを探し出す。12牧者がその群れを散らされたときに自分の群れを探し出すように、私は自分の群れを探し出す。私は彼らに、雲と密雲の日に散らされたあらゆる所から救い出す。13彼らをもろもろの民の中から導き出し、国々から集め、彼らの土地に連れて行く。私はイスラエルの山々と涸れ谷で、この地のすべての居住地で彼らを養う。14私は良い牧草地で彼らを養う。イスラエルの高い山々は彼らの牧場となり、その地で彼らは良い牧場に伏し、イスラエルの山々の豊かな牧草地で草を食む。15私は自分の群れを養い、彼らを伏させ——主なる神の仰せ。

ペトロの手紙一 5章1～11節

1私は長老の一人として、また、キリストの受難の証人、やがて現れる栄光にあずかる者として、あなたがたのうちの長老たちに勧めます。2あなたがたにゆだねられている、神の羊の群れを牧しなさい。強制されてではなく、神に従って、自ら進んで世話をしなさい。取すべき利得のためにではなく、本心から、そうしなさい。3割り当てられた人々を支配しようとせず、むしろ、群れの模範になりなさい。4そうすれば、大牧者が現れるとき、あなたがたは消えることのない栄冠を受けることとなります。

5同じように、若い人たち、長老たちに従いなさい。皆互いに謙遜を身に着けなさい。

「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお与えになる」からです。

6ですから、神の力強い御手の下でへりくだりなさい。そうすれば、しかるべき時に神はあなたがたを高くしてくださいます。7一切の思い煩いを神にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを心にかけていてくださるからです。

8身を慎み、目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、誰かを食い尽くそうと歩き回っています。9信仰をしっかりと保ち、悪魔に立ち向かいなさい。あなたがたのきょうだいたちも、この世で同じ苦しみに遭っているのは、あなたがたも知っているとおりです。10しかし、あらゆる恵みの源である神、キリストを通してあなたがたを永遠の栄光へ招いてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみの後で癒し、強め、力づけ、揺らぐことがないようにしてくださいます。11力が世々限りなく神にありますように、アーメン。

ヨハネによる福音書 10章7～18節

7イエスはまた言われた。「よくよく言っておく。私は羊の門である。8私より前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。9私は門である。私を通して入る者は救われ、また出入りして牧草を見つける。10盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。私が来たのは、羊が命を得るため、しかも豊かに得るためである。11私は良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。12羊飼いでなく、自分の羊を持たない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。——狼は羊を奪い、また追い散らす。——13彼は雇い人で、羊のことを心にかけていないからである。14私は良い羊飼いである。私は自分の羊を知っており、羊も私を知っている。15それは、父がわたしを知っておられ、私が父を知っているのと同じである。私は羊のために命を捨てる。16私には、この囲いに入っていないほかの羊がいる。その羊をも導かなければならない。その羊も私の声を聞き分ける。こうして、一つの群れ、一人の羊飼いとなる。17私は命を再び受けるために、捨てる。それゆえ、父は私を愛してくださる。18誰も私から命を取り去ることはできない。私は自分でそれを捨てる。私は命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、私が父から受けた戒めである。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・4月19日「復活節第3主日」の日課主題は「まことの羊飼い」。

・旧約日課は、「エゼキエル書」から、イスラエルを羊の群れに譬える預言章句の一部。使徒書日課は、「ペトロの手紙一」から、長老を筆頭とした教会共同体の人々への勧めを告げる箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、「良い羊飼い」の譬え。

旧約日課(エゼキエル 34 章より)

・「エゼキエル書」は、ユダヤ教正典(ヘブライ語聖書)の区分で「後の預言者」の第三に置かれた預言文書。前6世紀前半、第一次バビロン捕囚(前598年頃)によってバビロンに移送されたユダ王国捕囚王ヨヤキン(エコンヤ)に同地で仕えた預言者エゼキエルの「預言者の書」として編纂された。エゼキエルの預言は、その置かれた状況から一貫して親バビロニアの立場に徹しており、ユダ王国の片割れとしてユダの地に残されていたゼデキヤ王率いるエルサレム宮廷が親エジプトに傾きバビロニア支配に抵抗し続けることを非難するものとなっている。

・日課箇所は、本預言書中で「捕囚の第十二年」の枠組み(32~39章)の中に位置する。本預言書は、第一次バビロン捕囚(前598年頃)にヨヤキン王が捕囚王としてバビロンに移された年を「第一年」として年代を表示しており、エルサレム陥落・神殿破壊・第二次バビロン捕囚が起こった年(前587年頃)は「第十一年」と表示されるので、「第十二年」はその翌年という時期にあたる。「第十一年」の出来事は、通俗的には「南王国ユダの滅亡の年」とされるが、それは「ユダ王国エルサレム王権」の終焉であって、「ダビデ王家の宮廷」は、エゼキエルが仕えていた捕囚王ヨヤキンを筆頭にネブカドネツアル王臣下としてバビロンで存続していた。このような状況を踏まえて、エゼキエルは、日課箇所を含む34章で、ユダ王国のエルサレム王権がゼデキヤ王を最後に断絶させられたのは、王国指導者らがそれにふさわしい「牧者」のふるまいをしなかったためであり、神は彼らを排除して自ら「羊の群れ」を牧するために乗り出された上で、いずれ新しい「牧者」として「わが僕ダビデ」(37:24)を立てられるだろう、と預言を告げている。

・王国支配者を「牧者」(羊飼い)に譬えるのは、バビロニアを含むメソポタミアで古くからの伝統であったことが知られており、「旧約」中の指導者らも「モーセ」や「ダビデ」などが「羊飼い」の属性を持つ者として描かれている。エゼキエルの立場では、「主なる神(アドナイ・ヤハウエ)」はバビロニア王ネブカドネツアルを用いてユダ・エルサレム宮廷王権を排除し、同王を通してユダの人々を支配した後に、いずれ再びダビデ王家の系譜に属する者(つまり、バビロン捕囚王ヨヤキンの子孫!)がユダの「牧者」として立つことが許される日を迎えようという希望を告げているのである。

・34章の一連の「牧者」と「羊の群れ」のたとえは、「旧約」全体を貫く「良い指導者」の表象としての「良い羊飼い」像を明確に表している。このような「良い羊飼い」としての指導者像は、「新約」において、まず主イエスに適用され、続いて教会指導者ら(長老!)のあるべき模範像として用いられている。

使徒書日課(Ⅰペトロ 5 章より)

・「ペトロの手紙一」は、「新約」の区分で「公同書簡」に分類される書簡文書の一つ。使徒ペトロがアナトリア半島諸地方の信者らに宛てて(1:1)、実際には「シルワノ」が筆を持って記したもの(5:12)とされている。現代の聖書学者の中には、その使信内容がペトロ存命中の時代背景にそぐわないなどの理由から、ペトロの名を借りた偽書として扱う傾向にあるが、それは、教会がこの書簡を「ペトロ」の名のもとに読み、解釈してきたことを否定する理由にはならない。実際の筆記者として名が記されている「シルワノ」は、「パウロ書簡集」にパウロの協力者として挙げられる「シルワノ」(Ⅱコリ 1:19、Ⅰテサ 1:1、Ⅱテサ 1:1)と同一人物とされてきた。この「シルワノ」を、「使徒言行録」がパウロの協力者として描く「シラス」(使徒 15~18章で繰り返し登場)と同一人物と解する者もある。これらのことから、本書簡は、ペトロがパウロと協力関係を築いていることを前提に著されたものとして解釈される。

・日課箇所は、本書簡の「結び」前の最後の勧告で、「長老(プレスビテロス)」(1節)および「若い人たち(ネオーテロイ<ネオス)」(5節)に対する呼びかけが含まれている。「長老」と「若い人たち」は、単純に年長者と若輩者を指しているとも解せるが、おそらくは、信者としての経験を重ね、そのことを踏まえて指導的立場に着けられた「長老」職の者と、新たに信者として加わったばかりの「新人信者」の者を指している。実際、本書簡は、キリストを直接知らずに信じるようになった者たちに信仰者としての基本的な心構えや考え方を教える内容になっており、「新人信者」をおもな対象にしていると解せる。著者「ペトロ」は、使徒たちが常駐して直接指導することができない諸教会において、「長老」職に任じられた者たちが信徒教育、特に「新人信者」教育を担うにあたって必要な教育内容を伝え、両者が同じ土台に立って教会共同体を形成する者とされていく道筋を示すために、本書簡を著したと考えられる。ただし、実際に「長老」職が確立していた、とまでは断言できない。

・日課箇所でも繰り返し見られるように、本書簡において、キリストを信じる者の現実には、「この世で苦しみに遭う」ことから解放されておらず、却ってこれが信者に課された使命として考えられている。キリスト信者の蒙る苦しみは、「キリストの受難の証人」とされるためであると同時に、キリストの受けられた苦しみによって救われた者が起こされたように、信じる者の受ける苦しみによって、まだ救われていない者が救われるようになるためである、というのが本書簡の考え方。

福音書日課(ヨハネ 10 章より)

・日課箇所は、主イエスが「仮庵祭」のためにエルサレムに滞在されていた際に、生まれつきの盲人を癒されたことに難癖をつけてきたファリサイ派の人々に対して主イエスが批判を述べられた中で告げられた「羊と羊飼いをめぐる一連の教え(10:1~18)の一部。

・一連の教えは、「良い羊飼いのたとえ」として知られるが、主イエスがご自身を「良い羊飼い」として譬えて展開されているのは 11 節以下で、1~10 節ではご自身を「羊の門」に譬えて語っている(7 節、9 節)。7 節「羊の門(テュラ・プロバトーン)」は、直訳すれば「羊たちの門」で、端的に 1~5 節および 9~10 節で「羊(たち)」が「囲い」に入るための入り口を指している。なお、「ヨハネ福音書」5 章では、エルサレム神殿の施設名として「羊の門(プロバティコス)」(5:2)の言及があるが、これは祭儀に用いられる犠牲の羊を神殿に搬入するための通用口を指していると考えられる。

・一連の教えで明示しているように、「羊の門」と「羊飼い」では役割が異なるが、目的は一致しているということから、どちらも主イエス自身を指し示す譬えになり得るのだろう。その目的は、「羊」を必要に応じて「牧草地」に導き出して養い、また「囲い」の中に導き入れて安全を保つことにある。主イエスが「門」に譬えられることは、最後の晩餐の席での教えで御父に至る「道」に譬えられること(14:6)と一致する。

・主イエスを単なる「羊飼い」ではなく「良い羊飼い」と譬えることは、「盗人」や「強盗」あるいは「雇人としての羊飼い」に譬えられる者たちに対する批判を前提にしている。一連の教えはファリサイ派の人々に対する批判という文脈(9:40~41、10:6)で始められている。彼らが人々に対する指導者を自認していることを批判するに際して、「旧約」の伝統に即して人々(民)を「羊の群れ」、指導者を「羊飼い(牧者)」に譬えることは、「旧約」の典拠となる章句まで含めた使信となる。端的に、「良い羊飼い」の譬えが「エゼキエル書」34 章などを典拠としていることは、語り手(主イエス→教会指導者)にとっても、聴き手(ファリサイ派の人々や弟子たち→教会共同体)にとっても、自明のことであったと考えられる。

・16 節「この囲いに入っていないほかの羊」が誰を指しているのか、必ずしも明示的ではない。本福音書には、教会を「世」と区別される排他的な救済共同体と解させるような記述もあるが、他方で、神の救済計画を「世を救われるため」(3:17)とするような普遍主義的救済観も示しており、16 節の発言も、そのような普遍主義的救済観の表れとして解することはできる。

来週の誕生日 (4 月 19 日~25 日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-120「主はわがかいぬし」(= II 41)は、詩編 23 編のスコットランド詩編歌で、ウィリアム・ウィッテンガムの原歌詞をピューリタンの讃美歌作家フランシス・

ローズが補筆。曲は、19 世紀の詩編歌集で公にされ、1947 年の英女王結婚式で歌われ広まった。

・21-459「飼い主わが主よ」(= I 354)は、19 世紀前半に英国教会司祭の娘で讃美歌作家として活躍したドロシー・スラップの作詞とされるが、詳細は不明。曲は、19 世紀米国の音楽家で多くの教会音楽も作曲しているブラッドベリーの作。

・21-461「みめぐみゆたけき」(= I 294)は、19 世紀米国のバプテスト派牧師 J.ギルモアが詩編 23 編の説教後に着想して著した宗教詩。曲は、19 世紀米国を代表する教会音楽家 W.ブラッドベリーがこの詩のために作曲。

21-120「主はわがかいぬし」

The Lord's my shepherd, I'll not want

1. The Lord's my Shepherd, I'll not want; / He makes me down to lie / In pastures green; He leadeth me / The quiet waters by.
2. My soul He doth restore again, / And me to walk doth make / Within the paths of righteousness, / E'en for His own name's sake.
3. Yea, though I walk in death's dark vale, / Yet will I fear no ill; / For Thou art with me, and Thy rod / And staff me comfort still.
4. My table Thou hast furnished / In presence of my foes; / My head Thou dost with oil anoint, / And my cup overflows.
5. Goodness and mercy all my life / Shall surely follow me, / And in God's house forevermore / My dwelling-place shall be.

21-459「飼い主わが主よ」

Savior, Like A Shepherd Lead Me

1. Savior, like a shepherd lead us, / much we need thy tender care; / in thy pleasant pastures feed us, / for our use thy folds prepare. / Blessed Jesus, blessed Jesus! / Thou hast bought us, thine we are. / Blessed Jesus, blessed Jesus! / Thou hast bought us, thine we are.
2. We are thine, thou dost befriend us, / be the guardian of our way; / keep thy flock, from sin defend us, / seek us when we go astray. / Blessed Jesus, blessed Jesus! / Hear, O hear us when we pray. / Blessed Jesus, blessed Jesus! / Hear, O hear us when we pray.
3. Thou hast promised to receive us, / poor and sinful though we be; / thou hast mercy to relieve us, / grace to cleanse and power to free. / Blessed Jesus, blessed Jesus! / We will early turn to thee. / Blessed Jesus, blessed Jesus! / We will early turn to thee.
4. Early let us seek thy favor, / early let us do thy will; / blessed Lord and only Savior, / with thy love our bosoms fill. / Blessed Jesus, blessed Jesus! / Thou hast loved us, love us still. / Blessed Jesus, blessed Jesus! / Thou hast loved us, love us still.

21-461「みめぐみゆたけき」

He Leadeth me, O Blessed Thought

1. He leadeth me, O blessed thought! / O words with heav'nly comfort fraught! / Whate'er I do, where'er I be / Still 'tis God's hand that leadeth me.

Refrain: He leadeth me, He leadeth me, / By His own hand He leadeth me; / His faithful foll'wer I would be, / For by His hand He leadeth me.

2. Sometimes 'mid scenes of deepest gloom, / Sometimes where Eden's bowers bloom, / By waters still, o'er troubled sea, / Still 'tis His hand that leadeth me.
3. Lord, I would place my hand in Thine, / Nor ever murmur nor repine; / Content, whatever lot I see, / Since 'tis my God that leadeth me.
4. And when my task on earth is done, / When by Thy grace the vict'ry's won, / E'en death's cold wave I will not flee, / Since God through Jordan leadeth me.